

学園だより

Vol.90

2011.10
Nara Women's
University



大学構内の紅葉(奈良女子大学メールマガジンより)

福島スクリーニング報告	1
三方裕司	
教養広場 Liberal arts Forum	2
東日本大震災の現場から	
帯谷博明	
閉塞と開かれ、二つの記憶	
井口高志	
寄稿 私のチャレンジ	4
盛田侑希・鈴木麻衣・西村友里	
卒業生からの寄稿	7
一步を前へ踏み出して	
田中(旧姓 村本)志希子	
実りある学生生活を	
石原(旧姓 原田)奈緒	
学芸員生活九年目の雑感	
飯島礼子	
佐保会だより	10
こんな本を出しました	11
竹本憲昭・林田佐智子・松田 寛	
新任役員・新任部長紹介	12
新任教員紹介	13
学生生活支援	14
学生相談室から	
特に優れた業績による返還免除	
家計急変による奨学金	
授業料免除についてのお知らせ	
広部奨学金授与式について	
カルト集団に注意を!	
平成23年度就職活動支援行事カレンダー	
(後期分)	

福島スクリーニング報告

三方裕司

共生科学研究センター 准教授



YUJI
MIKATA

上述の黙祷の間以外はほとんど休み無しで続いた。作業終了後、放射能汚染のないことを確認してバスに乗りし、十九時に福島県庁に到着した。

住民の方々の緊張や不満や怒りなどを肌で感じながらの作業であったが、中には私の名札を見て、「奈良からわざわざ」と声を掛けてくださる方もおられた。また作業終了時にお礼の言葉を頂くことも多く、「少しはお役に立てたかな」と感じる事ができた。被災者の方が自宅から持ち帰られたワイシャツの線量がやや高かったり、アルバムの片面で線量計の目盛りが（許容範囲内ではあるが）大きく振れたりしたときには胸が痛んだ。普段の何気ない生活がどれだけ貴重で大切であるかを実感した。私にとって、「何に対しても、今できることをできる範囲で精一杯やる」という気持ちがいっそう強くなった福島派遣であった。

東北大震災に端を発した福島第一原発の放射能漏れ事故により、原発から二十km圏内にお住まいであった方々は避難生活を余儀なくされ、現在も多くの人たちが自宅に戻れないでいる。そんな中、五月から「一時帰宅支援事業」がスタートした。これは、二時間に限り自宅へ戻って、預金通帳、アルバム、パソコンなど重要あるいは生活に必要な物品を、一世帯あたりビニール袋一つに入る範囲内で避難先へ持ち帰ることができるといふものである。その際、立ち入り禁止となっている警戒区域から持ち出した物品に付着している放射性物質の量や住民の方々の全身の放射線量をチェックして、「許容範囲内であることを」を確認するという作業が必要である。文部科学省から各大学に対して、

そのような「住民一時帰宅支援事業に係る被爆スクリーニング」支援の依頼を受け、奈良女子大学からは、私を含め放射線障害予防委員会の六名の教員がボランティア登録した。本稿では、六月十一日に作業を行った私の一回目の派遣を通じて、現場の雰囲気や私自身が感じたことについて少しお伝えたいと思う。

作業三日の集合場所である福島県庁は、自衛隊装甲車が停まっているなど、まだ物々しい雰囲気が残っていた。そこ

から一時間半ほどバスに揺られて中継所である古道体育館（福島県田村市都路町）に到着した。この日集まってこられた方々は、双葉町と大熊町という、原発に非常に近い地域の住民であり、ここからさらにバスに乗って警戒区域内の自宅へ向かうことになる。住民への説明の冒頭で東京電力の人たちが深くお詫びする姿が印象的であった。軽い食事のあと、被災者の方々は、防護服を装着し、線量計と通信用トランシーバーを受け取りバスに乗り込んだ。この日はちょうど震災後三ヶ月にあたり、我々も含め全員で地震発生時刻の十四時四十六分に黙祷を捧げることになっていた。家族を失った多くの方々が慰霊のために花束を持ってバスに乗り込んでいった。



中継所に残った我々は、各自で昼食後、作業内容の説明を受けた。その後、防護服に着替えて住民が戻ってくるのを待った。スクリーニング作業は約一時間、



東日本大震災の現場から

帯谷 博明

文学部 准教授
人文社会学科 地域環境学コース



HIROAKI
OBITANI

宮城県仙台市と気仙沼市。私が二十代後半を過ごした「第二の故郷」であり、社会学の世界に進む礎を与えてくれた場所でもある。会社を辞める決心をし、大学院受験のため降り立った二月の仙台駅の突き刺すような寒さ。修論の作成に向けて聞き取り調査に思い始めたJR気仙沼線のディーゼルカーの匂い。「手鏡のような」と形容されるリアス式海岸・気仙沼湾に広がる養殖筏の風景。「お茶っこだも飲んでけ」と家に招き入れて話を聞かせてくれた地元の人たち。

映像で次々と飛び込んでくる信じがたい光景に呆然としながら、なかなか連絡が取れないもどかしい思いが募る。そのような状況の中、四月も後半に入った頃、ようやく現地を訪れる機会を得た。震災直後から被災地の複数の拠点で支援活動を展開しているNPOの視察チームに同行し、仙台市・一関市経由で、気仙沼市から南三陸町の歌津地区まで、二陸海岸沿いを車で回った。すでに震災から四十日以上が経過していたが、海岸付近は延々と瓦礫の山が続き、そのほとんどは手つかずの状態であった。気仙沼港では焼け焦げた大型漁船が何艘も繫留され、潮風に乘って鼻を突くような重油の臭いが漂ってくる。港からJR南気仙沼駅へと続くメインストリートは、両側に店舗や

保険会社の営業所が並ぶ通い慣れた場所なのに、跡形もなく破壊された眼前の風景と自分の記憶はどうしても一致しない。宮々と積み上げられてきた「空間の履歴」や「場所の記憶」とはこうも脆く儚く消えてしまうものなのだろうか。

気仙沼市内の唐桑地区は宮城県の北東端に位置し、半島の両側に小さな集落が点在している。遠洋漁業が花盛りだった頃、



津波で倒壊した「唐桑御殿」

漁船員たちが競って建てたという入り母屋造りの「唐桑御殿」は無残にも方々で倒壊していた。支援活動を展開している「RQ市民災害救援センター」の方は、ボランティアの数が圧倒的に不足しており、しかも短期の参加者が多いのでノウハウが継承されにくいこと、被災した人たち、とくに高齢者は（よそから来たボランティアの人たちに）直接あれこれ頼むのを遠慮してしまうので、地元の人を介さないとなかなか細かなニーズが把握できないことなど

を打ち明けてくれた。

唐桑地区の中でも、とくに舞根集落は調査で何度も通った場所である。ここは一九九〇年代に全国的に有名になった、養殖漁業を営む人たちが上流部の山に木を植える「森は海の恋人」運動の発祥の地である。だが養殖筏が浮かぶ見慣れた風景は一変していた。集落五十二戸のうち四十四戸が倒壊・流出し、筏や施設は跡形なく消えていた。六十代後半にさしかかった運動のリーダーは、介護施設に入所中だった高齢の母親を津波で亡くし、養殖施設や事務所も失った。幸いにして津波を逃れた自宅には一時、近隣の二十人以上が避難していたという。

四月以降、各地からさまざまな支援を得て、二十年という節目を迎えたばかりの運動の継続が決まった。本業の養殖業も裏山から切り出した木を使った筏づくりが始まっている。集落の多数の住民も海と向き合いながら再びここで暮らしたいという希望を持っている。課題は山積しているが、私はこれからも被害に遭った地域の人びとと向き合い、伴走していかなければと強く感じている。

閉塞と開かれ、二つの記憶

井口高志

生活環境学部
生活文化学科
准教授



TAKASHI
IGUCHI

私は、これまで病いや障害を抱えて生きていく人やその家族、そこで生まれるケアや介護という行為に関心を持って研究をしてきたが、それにまつわる二つの記憶がある。

一つは重苦しい記憶だ。「プシュー、プシュー、プシュー、ピー」。十五年前私は夏の間その音に悩まされていた。いや本当に悩まされていたのは、その音を発する本人と、その人の家族(妻)だった。けれども、私は、その音にびくっとして飛び起き、イライラした本人の体を動かし、胸にあけられた穴におさるおさる管を入れていった……。大学の学生課でふと見つけたそれなりに高給のバイト。それは、最終的には人工呼吸器を装着しなければ生きていけなくなるALSという神経難病の人の介護だった。週に三晩ほどその人の家に行き、夜中、一応仮眠のできる布団の敷かれた部屋で哲学書なんかを読むふりをしながら待機する。そして、まだかるうじてシワを作れるおでこを用いて発せられるナースコールに反応して体位変換や痰の吸飲を行う。緊張感の中で何回ものナースコールに反応してようやく一日の始まりと仕事の終わりである朝がやってくる。こんな繰り返しは、それなりの時給だったにも関わらず、結局一ヶ月半しか持たなかった。

元教師だった患者さんのピリピリした苛立ち、それにつきあい疲弊しきっていた妻という濃密な家庭の場に耐えきれなかったのだ。私にとっては「青春の失敗」のページに過ぎないのかも知れない。だが、患者や家族は病いを抱えた生を自ら終えることはできない。頭では分かっていたが、結局、逃げるようにそのバイトを辞めた。こんな重苦しい閉塞した風景が今も思い起こされる。

対して、もう一つは自分の知らない新しい世界へと開かれていくような爽快な記憶だ。その二年後に私は十歳ほど年上の金髪の男性の家や職場へ介助者として訪問するようになった。彼は地域で自ら介助者を見つけ、何人もの介助者を、スケジュールを決めて入れながらひとり暮らしをする脳性マヒ者だった。彼の介助は前もって何をするか特に教えられず、行っただけから色々なことを指示される。突然、大勢の車椅子の障害者たちみんな地下鉄に乗ってアピールをしようという運動に連れて行かれる。作ったことのない料理を少しの指示だけで作ってみる。彼の仕事の一端である施設訪問についていく。真夏の日差しのもとで電動車椅子に引き離されぬよう必死でついていきながら、あるいは慣れぬ料理を作りながら、障

害者と言われる人との関係の中の不思議な居心地の良さや開放感を感じていたように思う。結局、この介助のバイトは私が東京を離れるまで七年くらい続いた。

なぜだか分からないが、この二つのケアの場は、私の研究の直接のフィールドとはならなかった。私の主要なテーマは、認知症の人と家族・専門職との関わりや、認知症ケアの理念・制度の変遷の研究などであり、現場での課題解決を目指したというよりは、理念・制度変化の記述や、理念の変化の実践への影響の分析などの「引いた」視点でのものだ。だが研究の原点には、「閉塞感」と「開かれた感覚」という二つのケア経験の記憶がある。そんな記憶を頼りに「よいケアとは何か?」「病いや障害をもってよりよく生きられるには?」といった規範的な問いを考えていく時がいつか来るのかも知れない。



震災復興支援を通して

盛田 侑希

文学部 人文社会学科
文化メディア学コース 四回生YUKI
MORITA

三月十一日に東北地方で未曾有の大震災が起りました。

津波に流される車、着の身着のまま避難する人々…私はその惨状を見て、心が痛んだのと同時に、この人達のためには何か自分でできることはないだろうか、という思いが芽生え、どんなことでもいい、少しでもいいから震災からの復興支援活動に携わりたいと考えました。早速、文学部教員の小川伸彦先生を中心に、私が学生代表となって震災復興支援プロジェクトを立ち上げ、学生・教員有志を募って学内や街頭で東北地方・ニュージブランドの震災復興支援のための募金活動をしました。あまり人手が多くなかった上に、私を含めメンバーのほとんどが今まで募金活動をしたことがなく、手探りの状態で始めたので苦労も多くありましたが、多くの人の協力もあって、予想以上の額の義援金を集めることができました。人の温かさを実感すると同時に、責任ある活動をきちんと遂行することができたという達成感を感じる経験でした。

現在、私は震災支援ゼミナールの授業を受講しています。奈良から被災地への復興支援方法を学生各々が考え、実行する授業です。

授業の前半は被災地では何が必要とされているのかきちんと把握するために、各新聞紙に目を通して震災復興支援関連の記事があればそれをピックアップする、被災地の自治体のホームページを検索するなどして情報を収集し、支援方法を考えました。実際に被災地へボランティア活動に行くと被災者の声を聞いた人もいます。後半からは各自の考えを実行に移す作業に入っています。私は、大学で集めた募金で家電を購入し、被災地に送る『もしマジ』（もし奈良女



震災ゼミナールの授業風景
被災地にどのような支援をし、どのように実現していくのかを話し合っている様子

生が真面目に震災支援を形にしたら）プロジェクトに関わっています。現在、被災地の方のご要望を聞いた上で、扇風機一台とアイロン一台、アイロン台一台を宮城県、福島県の被災地に送りました。他にも、楽器の多くを津波で失った仙台フィルハーモニーが楽器を購入するために必要な資金を集める檀原交響楽団のチャリティコンサートで募金活動のお手伝いをしました。

被災地への支援活動を通して、自身が人間的に成長していると実感します。震災から数カ月が経過していますが、まだまだ支援を必要としている地域が多くあります。私はこれからも支援活動に尽力していきたいと考えています。皆さんも支援活動をしてみませんか？

Challenge

研究と私

鈴木麻衣

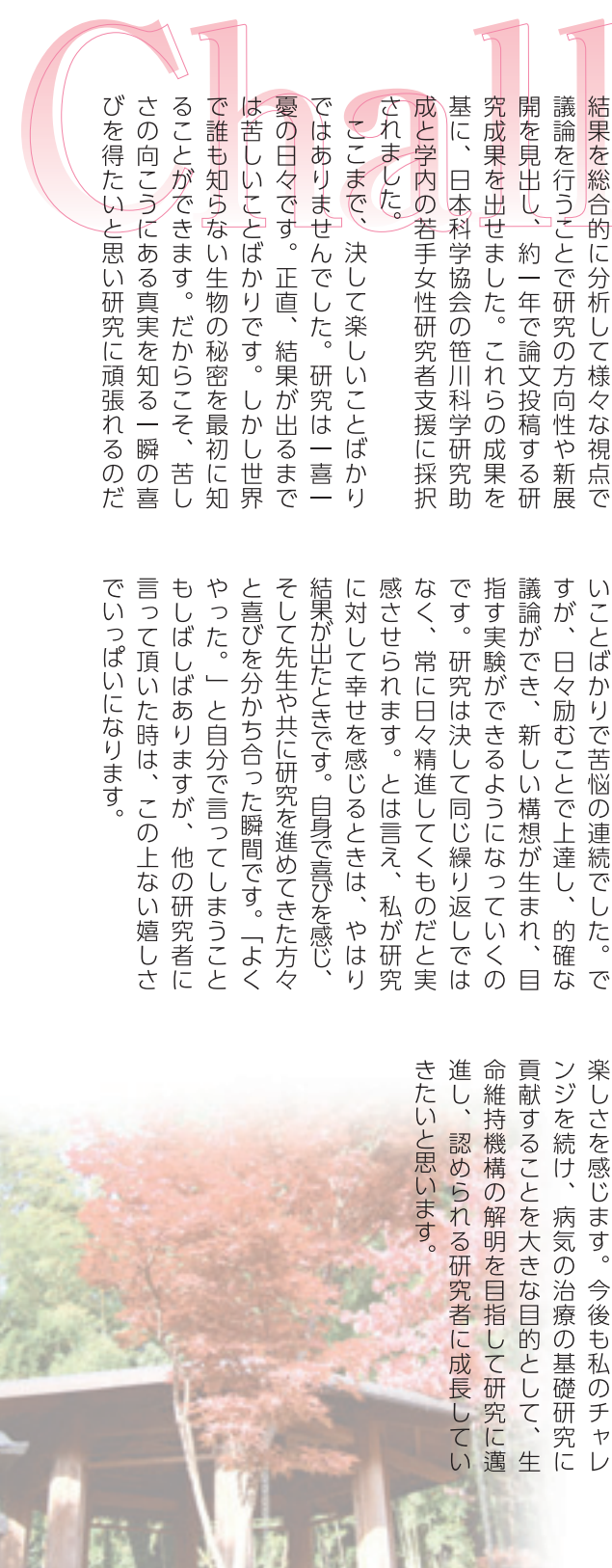
大学院人間文化研究科 博士後期課程
共生自然科学専攻 二回生

MAI
SUZUKI

奈良女子大学で研究をはじめた四年半。生命現象の仕組みの研究は非常に面白い領域です。私はヒトの病気の原因となる分子機構を解析し、その成果を治療や予防に役立つ新しい基盤に築き上げたいという想いを抱き、マウスや細胞を用いて白血病発症に関わる遺伝子の研究をしています。奈良女子大学で初めてとなるノックアウト（KO）マウスの作成を始めたのが、学部四年の終わりでした。試行錯誤を重ねながら研究を進めて行き、修士課程でKOマウスを完成させました。博士後期課程では、他大学の研究室との共同研究でより多くの知識と実験技術を身に付け、結果を総合的に分析して様々な視点で議論を行うことで研究の方向性や新展開を見出し、約一年で論文投稿する研究成果を出せました。これらの成果を基に、日本科学協会の笹川科学研究助成と学内の若手女性研究者支援に採択されました。

と私は思います。KOマウスの作成では、ES細胞に入れる直前に共同研究先の都合で一から組み換え体を作り直すものだったため、シヨックで戸惑いでしたが、「泣いても立ち止まっても時間がもったいないだけ、最良の選択肢は作り直すしかない」、答えはおのずと決まっていました。すぐに気持ちを切り替えて、確実に最速な方法を検討し二週間で作り直しました。博士後期課程でも、医学系分野の知識を勉強しながら新しい実験をし、専門の方々と議論していくことは大変でした。また、実験手法を学び導入していくことも新しいことばかりで苦悩の連続でした。ですが、日々励むことで上達し、的確な議論ができ、新しい構想が生まれ、目指す実験ができるようになっていくのです。研究は決して同じ繰り返しではなく、常に日々精進していくのだと実感させられます。とは言え、私が研究に対して幸せを感じるときは、やはり結果が出たときです。自身で喜ぶを感じ、そして先生や共に研究を進めてきた方々と喜びを分かち合った瞬間です。「よくやった。」と自分で言ってしまうこともしばしばありますが、他の研究者に言って頂いた時は、この上ない嬉しさでいっぱいになります。

学会等での発表も喜びを感じられる場です。様々な分野の研究者の方々から「とても面白い研究をやっているね。いい研究だよ。」「次も楽しみにしているよ。」と言われたとき、ディスプレイカッシオンをして力を認めてもらえたとき、頑張った研究してきてよかったと嬉しさを感じます。今後も私のチャレンジを続け、病気の治療の基礎研究に貢献することを大きな目的として、生命維持機構の解明を目指して研究に邁進し、認められる研究者に成長していきたいと思えます。



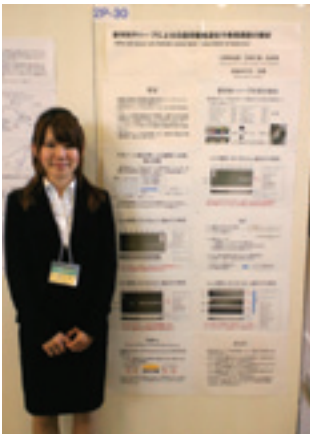
私の幸せな時間

YURI
NISHIMURA

西村 友里

生活環境学部 生活健康・衣環境学科
生活健康学講座 三回生

私は一回生の七月から生活健康学コースの健康医化学研究室に出入りしています。これまでに国内外の学会でポスター発表を行ったり、論文を執筆し



広島で開催された家政学会でのポスター発表

たりしました。また「生化学若い研究者の会」という団体に所属し、定期セミナーやサマースクールの主催にも携わっています。ここでしか学べない多くのことを実験できる環境に、とても充実感と有難さを感じています。今年七月には研究室に正式に配属され、今後いつそう研究に励もうと決意を新たにしているところです。

私が奈良女子大学に入学したきっかけは、「健康」でした。私は高校生の頃から健康に興味がありました。その背景には、物心ついた頃からスポーツをしていたことや、祖母が食にうるさかったことなどがあります。今日、医学が飛躍的に進歩する一方で、多種多様なサプリメントが出回り、ウェブ上に

はダイエット法がたくさん掲載されています。そうした中で、「健康」とは何か、身体の中で何が起きているのか、そして今、医療の世界で何が問題になっているのか、自分なりに考えてみたいという思いが強くなり、生活健康学コースに入学しました。

一回生で研究室に出入りするきっかけとなったのは、先生が授業中に「研究に興味がある人は研究室にいらっしやい」と言ってくださったからです。

それまで様々な講義がなんとなく高校の授業の延長のような内容に物足りなさを感じていました。先生から説明をお聞きして、分子生物学はまだ新しい分野であるけれども、「健康」と結びつけられる学問分野であることが分かりました。そして、実際に先輩方の研究風景も見せていただきました。研究室では大腸菌や培養細胞を用いて多様な実験が行われていました。先輩方が真剣そのものの表情で複雑な機器を駆使して実験しているのを見て、私は非常に興味をかきたてられました。先生に「やってみる？」と言われたとき、私は夢見心地で頷きました。そうして右も左も分からない状態で分子生物学という研究の世界に入ったのですが、先生や先輩方が丁寧に指導してくださったこともあって、私はすぐにのめり込みま

した。以来、授業とバイトの時間以外はほとんどすべて研究室での実験に費やしたといっても過言ではありません。

これは研究室に出入りするようになって分かったのですが、分子生物学の研究には高価な機材や試薬が必要となります。実際、研究室には、一台何千万円もする機材や数ミリリットル何万円もする試薬が何種類も置かれています。

私は今、こうした大学の研究室でできないことをさせていたでているのです。このような機会と環境を与えてくださった先生や先輩方に心から感謝しています。

私はある目標を持っています。それは、世界中の人がより健康になるための研究を行うことです。健康に長生きすること、それは万人共通の願いだと思います。学会やセミナーで優秀な先生や先輩方と接するたび、私は自分の未熟さを悔しく思います。より有益な研究をするために、もっと知識を得たい、もっと実験をしたいと心から願っています。そして、ゆくゆくは社会に貢献できるような成果を挙げられるよう、研究に励んでいくつもりです。

一步を前へ踏み出して

田中(旧姓/村本)志希子

文学部 人間行動科学科
教育文化情報学専攻 平成十四年卒業
玉川大学 教育学部
教育学科 通信教育課程 三年



SHIKIKO
TANAKA

大学を卒業してから九年の月日が流れました。横浜市で夫と二人の娘と暮らしています。去年の秋に玉川大学の通信学部に入學し、再び学生に戻りました。レポートや試験をかかえた日々は、嬉しくもあり苦しくもあり、歩みはともゆっくりですが、今、幼稚園教諭の免許取得を目指しています。

四年前の夏、上の子が通う幼稚園と考え方が合わず悩んでいた私は、いつも傍らにおいていた育児書に写真で載っていた幼稚園を訪ねてみることにしました。実際にどんな園なのかは分からないけれど、長女がまだ赤ちゃんだった頃、どんな幼稚園時代を過ごしてほしいと願っていたのか、思い出したいと思ったのでした。

こうして出会ったのが、金井幼稚園です。



金井幼稚園にて

その後を訪れ、園長先生の話に、子どもの育ちにつき合っていてなんて面白いんだろう。と、楽しくて大らかな気持ちで自分の中に湧き上がってくるの

を感じました。思いきって引越して、下の子は金井幼稚園に、そう思えてなりませんでした。とはいえ、すでに小学生になっていた長女を転校させることは不安で、悩みました。けれども、「学校が変わるのは嫌だけど、お母さんがそうしたいなら私はいいよ」、そう言うてくれた長女。通勤が不便になるけど、そんなの大丈夫と一貫して力になってくれた夫。失敗したと思ったら、戻っておいでと励ましてくれた友達。家族や皆が私を踏み出させてくれたのです。

金井幼稚園と出会ったことで、私の胸にひとつの希望が灯りました。これまでは、母として成長できれば、と思っていました。幼稚園で展開されている子どもの世界がなんだかとても面白そうで、幼児教育についても専門的に学んでみたい、子どもの育ちに懸命に取り組む人たちの仲間になれないかな、そんな気持ちを抱くようになりました。

この先どうなるのかは分かりませんが、方向性を得て、毎日とても幸せな道を歩いています。

奈良女で過ごしていた時は分かっています。先生と友人に恵まれて過ごした日々が私の中で確かな自信となり、いま、心惹かれることにチャレンジする力になっているのだと感

じています。本に書かれていることを鵜呑みにしないことも、物事は常に別の方ができることも、教育文化の研究室で学んだことです。また、「夢見るために醒める」、この言葉を私たち学生に教えてくれた恩師の、誰に対しても常に誠実に真摯に向き合う姿に、私もちゃんとした人間にならなければと、背筋が伸びる思いでした。卒業しても忘れることのないこうした学びは、今も私の心を育て続けてくれます。

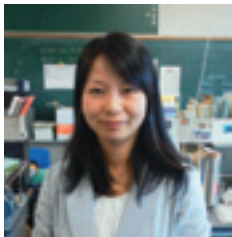
三月十一日。東日本大震災が起きました。天災の甚大さは勿論、原発事故により、自分たちの生活が見えないところまでどれほど多くの人や地域に支えられたものであったかと愕然としました。今は、どんな固定した考え方も避け子どもを放射能から守りつつ育ちを保証すること、そして福島の人たちと共に生きていくことを考えています。どんな小さなことも、明日を作っていくと信じて。



実りある学生生活を

石原(旧姓)/原田 奈緒

理学部 数学科
平成十八年卒業
大阪府立西成高等学校教師



NAO
ISHIHARA

「女子なのに数学好きなんて凄いわね!」
と言われ理系進学を決め、「奈緒ちゃん
に教えてもらったらわかりやすいわ!」
と言われ教師を志望し、「勉強の場に男
性はいらさないのだ!」の謳い文句に奈
良女子大学へ入学してきました。部活
動は、袴姿に憧れて、合気道部を選び
ました。周囲の人の意見に乗せられて
大学や部活を決めました。私にとっ
ては大正解、本当に楽しい大学生活で
した。

まず数学に関してですが、やはり高
校時代とは違い、単純に答えが出るも
のではなく、わけのわからない記号を
たくさん用いた数式に、毎日格闘する日々
でした。友人と一緒に、大学のソファ
ーで朝まで問題と向き合っていた日も
あれば、三条通りのレストラン、ドリ
ンクバーだけで粘って取り組んだ日も
ありました。そうかと思えば、友人と
大学の食堂で楽しく会話しているとき
に閃いて、その場でノートに解答を書
き出したり…とにかく、「考える」こと
が楽しい毎口でした。

また、合気道部では、主将を務めた
こともあり、普通では出来ない事をたく
さん経験しました。合気道は、性別や年
齢、体格差関係なく、いろんな相手と組
み手をします。主将になって、女子大だ
からといってなめられない部活にするこ

とを目標として日々練習に臨みました。
合宿の回数を増やしたり、積極的に出稽
古に参加したり、体育館が空いている時
は自主練習に動きました。こうやって
文章にすると辛い日々に見えますが、毎
日楽しくて仕方がありませんでした。練
習後も、仲間と食事に行って夜遅くまで
くだらない話で盛り上がりたり、技につ
いて熱く語り合ったりしていました。そ
のような努力の結果、なんと全日本合気
道学生演武大会で優勝することができま
した。大会後のあの充実感、感動は、今
思い出しても鳥肌が立つほどです。そん
な経験が出来たのも、かけがえのない仲
間がいたからで、彼女達と共に過ごした
時間は、私の一生の宝物です。

そんな思い出を抱えながら、今は大
阪府の高等学校で数学の教師として働い
ています。最
初は自分の理
想と教育現場
でのギャップ
に驚き、悩み
ました。合気
道部で部長を
していたので、
大人数を動か
すのは得意だ
と思っていた
のですが、奈



前任校(大阪府立金剛高等学校)でのクラス集合写真

良女の学生四十人と、ちょっとやんちゃ
な高校生四十人では訳が違う、とんだ思
い上がりだったと気付きました。先輩教
員に相談し、「とにかく、まずあなたが
楽しむこと、それだけで生徒は元気にな
ります。特に、女子は目標が無い子も多
い。あなたが働く姿が一つのライフモデ
ルともなり、彼女達のやる気につながる
んですよ。」と助言をいただきました。
そして、変な理想像は捨て、素の自分で
生徒達と関わっていくと、どんどん距離
は縮まってきました。

戸惑うことも多くありますが、行事
ごとに生徒がぐんぐん成長してゆくの
を肌で感じられ、やりがいの方が大き
いです。三年間で、人間ってこんなに
変わる!高校時代の伸びしろは、計
り知れないものがあります。輝かしい
成長の時代に立ち会える、教師とい
う仕事に就けて、本当にうれしく思い
ます。

学生の皆さん、興味を持って色々な
事に挑戦してください。何かをやるとき、
「成功」は約束されていないけど、「成
長」は約束されていると、私は信じて
います。実りある学生生活であること
を祈っております。

学芸員生活九年目の雑感

飯島 礼子

大学院人間文化研究科 博士前期課程
人間環境学専攻 平成十四年修了
奈良県立美術館



REIKO
IIJIMA

博士前期課程を修了後、学芸員として奈良県立美術館に配属されて九年目に入りました。しばしば出入りしているせいか、私にとって大学は今でも近い存在ですが、振り返ると学生時代というものはずいぶん遠くなったと感慨深いものがあります。

学芸員というのは、博物館・美術館などで収蔵品の調査や保管にあたり、展覧会を企画する専門職です。資料や作品などの「もの」を通して歴史や文化に関わりたい、というのがこの職業を目指した理由でした。ですからこの



二〇〇九年特別展「託す想い、伝える心」人形展
～(社)佐保会所蔵品を中心に～
鑑賞講座 岩崎雅美教授(当時)を講師に迎えて

世に一つしかない作品を自分の手で取り扱うのは、嬉しいことでもあり、またやり甲斐を感じる所でもあります。しかし取り扱いを誤ると作品を傷つけてしまうという点で責任は重大です。特に作品の借り受けや展示作業の際には、無事に作業を終えられるか、神経質になるのは今でも変わりません。

九年という時間に見合うほど、学芸員として成長できているのか疑問もありますが、その中で視野が広がってきた部分もあります。例えば展示作業。初めのうちはお客様に見せられる状態に仕上げるので精一杯でしたが、近年はより良く見せるための工夫について意識するようになりました。同じ作品でもどの部分を見せるかによって置き方は変わりますし、照明の当て方や展示台・展示ケースの壁の色によって、作品の見え方はガラリと変わります。他の館の展示を見るとよく分かります。「こうすればいい」という鉄則は未だにつかめていませんが、作品にできるだけ負担をかけず、しかも作品の良さを十分に引き出した展示、お客様が作

品に見入ってしまうような見せ方ができるようにしたい。それが今の目標です。

専門職、研究職と認識されている学芸員ですが、だからと言って、自分のやりたい企画ばかりできるわけではありません。雑務もあれば、得意分野からはずれた仕事を担当することもあります。もちろんやり終えた時の収穫は大きく、自分の仕事の幅が広がるという意味では「無駄な仕事」というものはありません。それでも目の前の仕事に追われる現状に、研究者として成長できていないのではと悩むこともありえます。きつとこの種の葛藤はどんな職業にも共通することでしょう。その点、学生時代は自分の好きなことに使える時間の多い、そしてそれが許される貴重な期間だと思います。在学中の皆さん、研究・課外活動・アルバイト…好奇心を持って、色々なことに心ゆくまで取り組んでみてください。迷いや悩みも含めてその中で得た経験が、人生の指針になってくれることと思います。

佐保会だより

若き卒業生、就活と実社会を大いに語る

（第十七回在学生と卒業生との集いから）

同窓会佐保会では大学との共催で、在学生の学業や就活に役立てて頂くために、若手会員をゲストスピーカーとする交流会を開催しています。本年六月の夕方、キャンパス内の佐保会館で開かれた交流会では、念願の専門職公務員となって活躍中の会員二人の体験談を伺いました。在学生側は入学間もない学部一回生から大学院博士後期課程の院生までが参加して、活発な質疑や懇談が行われました。専攻や志望は異なっても年齢が近い先輩の実話なので共感が持て、今後の学びの参考になったと好評でした。

今回のゲストスピーカーは、次の方々です。

針多暁子さん

（平成十八年文学部人間行動科学科卒、平成二十年大学院博士前期課程修了）
大阪府福祉職として、府立知的障がい者入所施設でケースワーカーを務めておられる。

栃原悠希さん

（平成二十二年生活環境学部 食物栄養学科卒）
久留米市栄養職として、市保健所で市民の健康増進のための啓発指導をされている。

初めにパワーポイントを使って就職までの苦労話や職歴、職務の実態等の紹介がありました。先輩二人に共通しているのは、実力証明となる国家資格をバックに、まだ日が浅くとも既に一定の裁量権があるポストに就き、市民を対象に専門性を発揮できることに大きな喜びを感じておられる点です。話の端々に仕事に対する誇りと、公務員であることの自覚がにじみ出ていました。

針多さんは発達障害をメインに勉強していましたが、安定した専門職に就くには院修了で得られる「臨床発達心理士」の資格だけでは不十分と感じ、国家資格「精神保健福祉士」を取るために夜間の専門学校にも通学。国家試験の受験準備と修士論文が同時進行となったために、就活は卒業間際になつてから。このため、いったん医療・福祉専門人材会社の営業職に就職し、社会人としてのスキルやマナーを習得した後、公務員試験にチャレンジしたとのこと。遠回りに見えるが、大阪府はこの職種では経験者採用に力を入れており、専門職としての視野が広がったという意味でも、三年間の民間勤務は決して無駄ではなかったと強調しておられました。



栃原さんは四回生の秋に実家に近い久留米市の採用試験にチャレンジ。年末に、大卒で得られる「食品衛生監視員任用資格」だけでなく「管理栄養士免許」取得見込での、いわば条件付き採用内定を得た。ところが管理栄養士国家試験は卒業式直前、合格発表が五月のため、正式任用は卒業後一ヶ月経った五月になったとのこと。続けて給食施設の巡回指導や食育イベントなど、多彩な職務内容について具体的な説明があり、専門職だからこそ市民や関係団体を動かすコミュニケーション能力や事務能力、企画力など、幅広い能力が求められることを印象的に語られました。

参加者からは、在学中にしっかりと目標を立てて実現に向けて着実に努力することが大事、また、勉強だけでなく部活・バイト・ボランティア等を通じて多様な対人関係を経験しておくことが必要と実感した等々の感想が寄せられ、実り多い交流会でした。

（文責 山川明子）



この本は、「未来の地球をデザインするために必要な最先端の研究成果を、さまざまな視点から解説」（弘文堂websiteから）している事典である。

オールカラーで、見開き2ページで1項目ずつ、全258項目が網羅されている。高校生以上の一般の読者が対象であるが、研究者や大学院生も自分と異なる分野の内容を広く知るために役に立つであろう。私はその中の1項目「成層圏オゾン破壊問題」を担当した。実は、この問題は大変広範囲の内容を含んでおり、とても2ページで網羅できるようなものではない。もともと「南極オゾンホール」というタイトルでの執筆依頼だったので南極オゾンホールを中心に解説したが、紙面の制約で不十分な内容になってしまった。本格的に成層圏オゾン破壊問題を勉強したい人には、拙著「地球規模の環境問題Ⅰ」（大来佐武郎他編、中央法規出版、全390頁、1990年）中の「オゾン層破壊の機構」（44-64頁）の方も読んでほしい。

（『地球環境学事典』
総合地球環境学研究所編
2010年、弘文堂、25,000円+税）

林田 佐智子

理学部 教授
情報科学科 自然情報学講座



SACHIKO
HAYASHIDA

「地球環境学事典」



現代アメリカ小説にも、いろいろなものがあります。ヘミングウェイの『老人と海』、サリンジャーの『ライ麦畑でつかまえて』など、広く読まれている人気作品から、ピンチョンの『重力の虹』のような難解で奥の深い名作まで、実に多種多様です。また、多くの現代アメリカ小説が邦訳され、日本で愛読されてきました。

本書では、そのような一般によく知られている作家・作品ではなく、アメリカ文学研究者の間でも、知名度こそ高いけれど、論者の対象となることが比較的に少ない作家・作品を多くとりあげました。ジョン・ホークス、ウィリアム・ギャディス、イシュメール・リードなどの書いた小説はきわめて実験的で、小説というジャンルの持つ可能性を意欲的に探究していますが、そのような作品の魅力や、文学理論で一般化して論じることを避け、個々の作品に即して具体的に分析してみました。

現代アメリカ小説の知られざる側面に関心をお持ちの方に、お薦めします。

（『現代アメリカ小説研究』
竹本憲昭著、2011年、
大学教育出版、2,800円+税）

竹本 憲昭

文学部 准教授
言語文化学科 ヨーロッパアメリカ言語文化コース



NORIAKI
TAKEMOTO

「現代アメリカ小説研究」

新任役員紹介



富崎 松代

MATSUYO TOMISAKI

理事・副学長（企画・研究担当）

附属図書館長

昨年度まで、男女共同参画推進室と附属図書館の業務に関わってきました。学長のリーダーシップと多くの方々との協力により、「女性教員比率30%以上」の第2期の中期計画への記載、「共助」支援事業の周知、図書館入館者数の増加（2年間で約1万人増）等が実現しました。これまでの業務を兼務し現職に就いてから4ヶ月が過ぎました。大学を取り巻く情勢がより厳しくなる中で、何をすべきか・何ができるのかと自問自答を繰り返しています。前走者から受け取ったタスクを次につなぐために、再度握りなおしてゆっくり走りしたいと思います。



中島 道男

MICHIO NAKAJIMA

理事・副学長（教育・学生支援担当）

附属学校部長

4月から、道路を挟んで向こう側、北魚屋東町の住人になりました。教育・学生支援担当の理事・副学長を務めております。附属学校部長も兼務していますので、守備範囲はとてつもなく広いわけです。長期と短期の課題を定めて…というわけにはなかなかいかず、日々の業務を何とかこなしている、というのが実情です。研究についてはしばらく減産体制でいくしかありません。教育担当ですので、ゼミ等教育面には影響がでないようにしたいと思っています。

いま、世の中は女子ブーム。サッカーもゴルフも世界で勝つのは女性。本学も女子大という特徴を活かしさらなる発展をめざしたいと思います。ご指導ご支援のほどよろしくお祈いします。



齊藤 広志

HIROSHI SAITO

理事（管理運営担当）

事務局長

伝統ある奈良女子大学の一員に加えていただき、大変光栄に思うとともに、その責任の重さを痛感しています。

本学も、法人化後8年目を迎え、今年度は第2期中期目標・計画の2年目の歩みを始めておりますが、わが国の経済状況は東日本大震災の影響も受け、益々厳しさを増し、大学運営の基盤となる運営費交付金を始め、国立大学を巡る情勢は極めて厳しいものがあります。このような先の見えない時代だからこそ、本学の真価が問われているものと考えます。学長を始め、教職員の皆様と一緒に本学を盛り上げるための努力をしてみたいと思いますので、ご指導・ご支援をよろしくお祈いいたします。

新任部局長紹介

①所属学部等・職名
②所属学科・専攻分野



今岡 春樹

HARUKI IMAOKA

生活環境学部長

①生活環境学部：教授
②生活健康・衣環境学科 アパレル工学

私の習った学問は制御工学とシステム工学です。世の中の現象を方程式で表現し、その現象を理解したりコントロールしたりする方法と方法論です。その後、具体的な衣服に関する研究を続けてきました。生活環境学部は大変広い分野を研究します。健康で文化的な生活をする、生活手段としての衣食住をコントロールすることを教育研究するユニークな学部です。この学部名称は国公立で一つしかありません。ユニークであることはそれだけで魅力ですが、生活者視点からの生活設計と製品設計に関する教育研究を世界のモデルにするのが夢です。

こ ん な



日本は島国で資源の量は限られているため、国勢維持には技術力の保持が必要である。長期的な視点で重要なのは、将来の日本を担う若手の育成である。奈良女子大学附属中等教育学校は平成17年にスーパーサイエンスハイスクール（SSH）に指定された。これは将来有望な科学技術系人材を育成するために文部科学省が実施している制度である。本学附属中等教育学校は、生徒が理数系の研究に興味を抱く適切な環境を整え、生徒が主体的に学習できる斬新な教育を行っている。その結果、SSH全国生徒研究発表会や日本学生科学賞で優秀な成績を残し、高く評価されている。こうした実績を踏まえて、具体的にどのような指導・説明を行ったのか、教育に関わった先生方に執筆をお願いし、本書を出版することができた。将来、高等学校や中等学校で理数系の教鞭をとる方々にも十分参考になる内容である。この場をお借りして、執筆に携わった多くの先生方に心から感謝したい。

〔奈良女子大学附属中等教育学校
未来を拓く 理数教育への挑戦〕
松田寛・吉田信也編著、2010年、文理閣、
1,900円＋税）

松田

寛

生活環境学部 教授
生活健康・衣環境学科
生活健康学講座

SATORU
MATSUDA

「奈良女子大学附属中等教育学校
未来を拓く理数教育への挑戦」

新任教員紹介

①所属・職名 ②所属学科 ③専攻分野
④出身地・出身校(学部、学科別50音順)

YUMIKO KATAOKA 片岡 悠美子

- ①理学部 助教
- ②化学科
- ③錯体化学
- ④滋賀県
- 滋賀県立膳所高校
- 島根大学総合理工学部物質化学科
- 大阪市立大学大学院理学研究科物質分子系



奈良での新生活

今年1月から、奈良女子大学に助教として赴任いたしました。地元である滋賀県から奈良県へ移り、美しい自然や歴史的な風土、文化遺産に囲まれた古都奈良での新生活を楽しんでいます。

専門は錯体化学で希土類錯体の発光特性や機能化に関する研究を行なっております。

今後とも研究室の学生さんとともに奈良女子大学での研究生生活を楽しくしていきたいと思っておりますのでどうぞよろしくお願い致します。

ATSUSHI ISOBE 磯部 敦

- ①文学部 准教授
- ②言語文化学科
- ③近世近代の書籍文化研究
- ④新潟県
- 新潟県立村上高等学校
- 中央大学文学部文学科(国文学専攻)
- 中央大学大学院文学研究科博士前期課程(国文学専攻)
- 中央大学大学院文学研究科博士後期課程(国文学専攻)



奈良ライフ

新潟に生まれ育ち、東京で学生生活を送り、山梨が結婚後の拠点。そして今年度からは奈良で生活するようになりました。気がつけば南下、平野から盆地へと移動しています。

高校の修学旅行以来の奈良ですが、あらためて奈良の歴史、とりわけ近世から近現代のそれにわくわくしている毎日です。私は書籍や新聞の生産・流通・享受のありようを研究していますが、それらを軸に、私のことばで奈良を語っていきたくと思います。

TAKEO OKAZAKI 岡崎 武生

- ①理学部 准教授
- ②数学科
- ③代数学・多変数保型形式論
- ④奈良県
- 私立東大寺学園高等学校
- 東京大学理学部数学科
- 大阪大学理学研究科博士前期課程数学専攻
- 大阪大学理学研究科博士後期課程数学専攻



岡潔が過ごした奈良女子大学理学部数学科にて

東京大学・大阪大学・京都大学を経て、出身地である奈良に赴任して参りました。岡潔も愛した緑豊かで静かな時間の流れる古都奈良で、これまで培われた奈良女子大学の伝統を守ってゆく一員になれたことを大変光栄に思います。そして学生の皆さんには、四季の美しさを感じながら悔いの残らない充実した学生生活を送ってほしいと願っております。研究はもちろん教育活動にも励んでいく所存ですのでこれからどうぞよろしくお願い申し上げます。

YASUNORI OGURA 小倉 裕範

- ①生活環境学部 教授
- ②食物栄養学科
- ③分子生物学・免疫学
- ④千葉県
- 千葉県立千葉高等学校
- 金沢大学医学部
- 京都大学大学院医学研究科



楽しみです

ずっと実験系研究者としてやってきた自分が、奈良女子大に研究室を構えてあらためて思うのは、女性研究者たちの特質です。研究の世界というのは優れた研究さえできれば男も女も関係ありません。という男らしさ、女らしさがない世界でもないのです。女性研究者の仕事というのは、きめ細やかさや粘り強さで明らかに秀でています。これから奈良女の皆さんと一緒にどんな仕事ができるのか、とても楽しみにしています。

YUMIKO ICHIHARA 市原 由美子

- ①理学部 准教授
- ②数学科
- ③整数論
- ④信州大学理学部数学科
- 名古屋大学大学院多元数理科学研究科博士前期課程
- 名古屋大学大学院多元数理科学研究科博士後期課程



今後への期待

奈良の落ち着いたある穏やかな環境や人の良さに触れる度に、歴史ある奈良女子大学に所属することができたことを嬉しく思っています。

私の専門は数学で特に整数論・解析的整数論と呼ばれる分野です。大学生時代は解析を敬遠していたので、将来解析と関わることになるとは思ってもいませんでした。出会いや知ることや学ぶことを通して、また思いもしなかった日が来ることを期待しています。

TOMOKO TAKEMURA 塚村 智子

- ①理学部 助教
- ②数学科
- ③確率論
- ④福岡県
- 福岡県私立明治学園高等学校
- 奈良女子大学理学部数学科
- 奈良女子大学大学院人間文化研究科博士前期課程数学専攻
- 奈良女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程複合現象科学専攻



恵まれた環境の中で

私は学生時代、奈良女子大学でたくさんの事を学び、素晴らしい先生・素敵な友人たちと出会いました。古都の落ち着いた環境の中で学び、奈良だけでなく大阪や京都へ友人と出かけ様々な文化に触れる事ができました。そんな私にとって、とても恵まれた環境の中で研究者としての第一歩を踏み出せることとなり大変嬉しく思っています。

先生として、また先輩として、みなさんとたくさんのご事を学びたいと思っています。

RUMI KUDO 工藤 瑠美

- ①生活環境学部 助教
- ②住環境学科
- ③建築材料
- ④山形県
- 山形県立寒河江高等学校
- 東北工業大学工学部建築学科
- 東北工業大学大学院工学研究科建築学専攻



関西に赴任して

茨城県の建築研究所で専門研究員を経て、奈良女子大学に助教として赴任することになりました。これまで関西にはご縁がありませんでしたが、自然豊かな奈良の環境は、生まれ故郷の東北を思い出し、すぐに慣れ親しむことができました。しかし、関西弁には未だに慣れず、つい東北弁がでてしまい苦笑している毎日です。

教員としても研究者としてもまだまだ未熟者ですが、精一杯頑張りますのでどうぞよろしくお願い致します。

NAOMI OTA 太田 直美

- ①理学部 助教
- ②物理科学科
- ③宇宙物理学
- ④神奈川県
- 神奈川県立平塚江南高校
- 東京大学理学部物理学科
- 東京大学大学院理学系研究科物理学専攻修士課程
- 東京大学大学院理学系研究科物理学専攻博士課程



奈良から発信する宇宙

昨年12月に東京理科大学から本学に参りました。初の関西生活ですが、元気な女子学生達に囲まれ、楽しく毎日を送っています。専門は宇宙物理学で、人工衛星の観測データを使って銀河や銀河集団の進化を研究しています。また、JAXAが中心となって進めている将来衛星計画ASTRO-HIにも参加しています。奈良女から世界へ向けて新しい科学成果を発信していけるように、教育研究に力を注いでいきたいと考えています。

☆特に優れた業績による返還免除（大学院 第一種奨学金）

大学院において、日本学生支援機構第一種奨学金の貸与を受けた学生を対象として、在学中に特に優れた業績をあげた者として認定された場合に貸与期間終了時に奨学金の全部または一部の返還が免除される制度があります。

詳細については、1月ごろに学内掲示板にてご案内しますので、ご確認ください。

☆家計急変による奨学金（緊急採用・応急採用）

失職、破産、事故、病気、死亡等若しくは火災、風水害等の災害等により家計が急変し、緊急に奨学金が必要となったと認められ、家計急変の事由が発生してから12ヶ月以内である者を対象として、年間を通じて随時申請ができる緊急採用・応急採用の制度があります。

詳細については、学生生活課の窓口にてご相談ください。

授業料免除についてのお知らせ

平成24年度前期分授業料免除及び徴収猶予に関する申請書類の配布及び申請受付を下記のとおり予定しています。

詳細については、2月上旬に本学ホームページ及び掲示板にてお知らせすることとしています。

申請書類配布：2月上旬～4月上旬
申請受付：4月上旬～4月中旬

広部奨学金授与式について

平成23年度広部奨学金授与式が7月11日(月)にコラボレーションセンター応接・会議室にて行われました。

広部奨学金は、本学卒業生の故広部りう殿(福井県出身 奈良女子高等師範学校本科学部化学部1期生 大正2年3月卒業)のご遺志により寄附された資金をもって設けられた奨学金制度です。各学部・研究科長より推薦された人物・学業ともに優秀な本学学生に授与するものであり、今年度は次の8人に証書及び奨学金が野口学長から贈られました。



文学部	人文社会科学	3回生	雲下 愛子
文学部	言語文化学科	4回生	池幡由衣子
理学部	生物科学科	4回生	宇野 由紀
理学部	情報科学科	4回生	福尾 真実
生活環境学部	生活健康・衣環境学科	4回生	大森 佳
生活環境学部	生活文化学科	4回生	高橋 美圭
人間文化研究科博士前期課程	食物栄養学専攻	2回生	中島みのり
人間文化研究科博士後期課程	社会生活環境学専攻	2回生	邵 盈榕

TAKASHI IGUCHI

井口 高志

①生活環境学部 准教授
②生活文化学科
③医療社会学、家族とケアの社会学
④山梨県
北社市立甲陵高校（当時は組合立）
東京大学文学部
東京大学人文社会系研究科



奈良の空気

私の奈良のイメージは河瀬直美監督の映画の中の暑い夏の風景ですが、まさに節電の今年、その暑い空気を体感しています。関東甲信越圏ですと生活してきた私は、関西生活も初体験ですが、山に囲まれた生活が長かったためか、近くに山のある奈良市の生活はとても落ち着く感じがします。専門は家族、医療、福祉の社会学的研究で、認知症ケアに関することを主要なテーマとしています。どうぞよろしく願いいたします。

学生生活支援

学生相談室から

●学生相談室を、一度訪ねてみませんか。

学業や進路の不安、日常生活で困ったこと、対人関係など、さまざまな心配事について一緒に考えましょう。話を聞いてもらうだけでも、落ち着くこともあります。相談室はあなたの話にじっくり耳を傾けます。そのことで解決の糸口が見つかるかもしれません。内容に応じて適切な人や機関を紹介することもできます。

●開室日及び開室時間

月曜日～金曜日 午前10時～午後5時
夏季休業期間中は原則として月曜と木曜のみ開室
8月第3週と第4週、12月27日～1月5日、
入学試験日(前期・後期)は閉室します。
上記以外で閉室する場合は、ホームページ又は相談室前にその旨を掲示することにより、お知らせします。
学生相談室の場所は大会館3階です。
TEL. 0742-20-3925
Eメール soudan@cc.nara-wu.ac.jp
HP <http://www.nara-wu.ac.jp/soudan/>

●スタッフ (2011年度)

■相談受付

金 文子 (月曜日・水曜日・金曜日)
岩井 涼子 (火曜日・木曜日)

■カウンセラー

皆藤 靖子 (臨床心理士)
竹村 百代 (臨床心理士)

■相談員

千本 英史 (教員)
渡邊 利雄 (教員)
松田 覚 (教員)

平成23年度就職活動支援行事カレンダー（後期分）

就職を希望する学生に対して、各種の就職活動支援行事を企画・実施しています。就職マニュアル本からは得られない知識や情報等の収集の場として、積極的に参加・活用してください。

行事の詳細な内容や、実施日時・場所に変更があった場合、また、下記以外に追加で講座を開催する場合などは、順次掲示で通知します。

図書館横の学生生活課の掲示板をいつも見るように心がけてください。

【就職支援対策講座】

*企業・教員・公務員等に拘わらず、就職希望者全員が受講対象です。

月・日	曜日	就職活動支援行事（対策講座名）	時間	教室	対象
10/12	水	正しい就活の情報収集	16:30～18:10	S235	3年生・M1
10/17	月	就活に必須のマナー	16:30～18:40	S235	3年生・M1
10/20	木	筆記試験対策講座	16:30～18:10	N101	学年不問
10/25	火	筆記試験対策模擬テスト【有料】	16:30～18:10	G101	3年生・M1
10/26	水	エントリーシート対策Ⅰ	16:30～18:10	S235	3年生・M1
11/9	水	エントリーシート対策Ⅱ	16:30～18:10	S235	3年生・M1
11/16	水	エントリーシート対策模擬テスト【有料】	16:30～18:10	G201	3年生・M1
11/18	金				
11月中旬予定		就活のためのメイクアップセミナー	16:30～18:10	未定	3年生・M1
11月下旬(土)予定		グループディスカッション対策講座	①10:00～12:00 ②14:00～16:00	G202 G203	3年生・M1 (県内大学合同)
11月中旬～12月予定		コミュニケーション講座	16:30～18:10	未定	3年生・M1
11/28	月	面接（全般）対策	16:30～19:10	S235	3年生・M1
12/3	土	模擬グループ面接	①10:00～12:00 ②14:00～16:00	G202 G203	3年生・M1
12/5	月	ナビ各社の説明	16:30～18:10	S235	3年生・M1
12/7	水	就職内定者による体験報告会	16:30～18:10	S235	3年生・M1
12/19	月	就活の総まとめ	16:30～18:10	G201	3年生・M1
24. 1/18	水	学内合同企業説明会事前研修会	16:30～18:10	S235	3年生・M1
1/28	土	学内合同企業説明会	13:00～17:00	S235、記念館 大学会館	3年生・M1
2月中旬(土)予定		「関東地区就職希望者のための就職懇談会」 (同窓会 佐保会東京支部との共催)	13:00～16:00	佐保会 東京会館	2年生以上

【教員・公務員対策講座】

*教員・公務員志望者は、併せて就職支援対策講座の受講が必要です。

月・日	曜日	就職活動支援行事（対策講座名）	時間	教室	対象
12/15	木	教員・公務員採用試験合格者体験報告会	16:30～18:10	E107	2年生以上
2月実施予定 (4日間)		教員・公務員採用試験対策論文講座【有料】	9:00～12:10	E109	2年生以上

セミナーやガイダンスに授業等で参加できなかった人は、ビデオ撮影したものをキャリアサポートルームで視聴することができます。後日、時間があるときに、学生生活課就職係に申し出てください。

カルト集団に注意を!

「カルト」(cult)とは、もともと「崇拜」とか「熱狂」といった意味ですが、今日ではもっぱら熱狂的な宗教集団を指して使われていることばです。オウム真理教事件のことなどは、みなさんも聞かれたことがあると思います。

世の中にはさまざまなカルト集団がありますが、どの集団も特に、親元から離れて人生の新しい段階に至って期待と不安の両方を併せ持っている大学生を標的に、勧誘活動を繰り返しています。残念ながら本学においても、彼等のさまざまな活動が確認されています。

カルト集団の手口は、初めは宗教的な勧誘であるとあきらかにすることなく、あるいはスポーツ、あるいは文化活動などへの誘いをかけ、じゅうぶんに引き込んだと判断して初めて自分たちの正体を明らかにする点で共通しています。その時点では集団メンバーと人間的な関係が造られていたり、あるいは「洗脳」が進んでいたりして、なかなか抜け出せないところに追い込まれがちです。

しつこい勧誘などを受けて、「あれ?」と疑問に思ったら、ぜひまわりの教員や学生生活課学生生活係(F棟1F、TEL:0742-20-3280)、学生相談室(学生会館3F、TEL:0742-20-3925)などにご相談ください。あなたのご連絡がカルト集団の跋扈の防止に繋がります。もちろん相談の秘密は厳守されます。

なお本学では、水曜日午後開設(前期)している「大学生活入門」の中で「キャンパスにおけるカルトの実態」についても解説しています。この講義に出席していなくても、その講義レジュメが欲しい人は学生生活課学生生活係に申し出てくださいればお渡しができます。